

題目

自己志向他者志向エゴグラム IUE 下位尺度の自己志向「養育的親」INP と他者志向「養育的親」UNP の優位な心理機能比較

著者

西川和夫（財団法人田中教育研究所）

掲載誌

交流分析研究（日本交流分析学会） 2014年 第39巻第2号 77～90ページ

分類

質問紙調査統計研究

問題と目的

共分散構造分析を適用し、エゴグラム IUE 下位尺度の自己志向「養育的親」INP と他者志向「養育的親」UNP それぞれが優位に作用する心理機能の比較を行った。複数心理尺度との相関を求めた先行研究の結果において、INP と UNP は共に、高い尺度得点が良好な心理的適応をもたらす傾向を示したが、両者の相関パターンはそれぞれ異なっていた。全般的に、INP は自己肯定的で安定した自己の心理的状态と強く関連した。対して UNP は、他者との親密で温かな人間関係を形成するように機能した。以下研究1と研究2で、INP および UNP それぞれが弁別的に優位に作用すると仮定される心理機能を分析する。

研究1

目的 INP において UNP より優位に作用すると仮定される心理機能を、因果モデルを仮定した共分散構造分析を適用して仮説検証する。＜仮説1＞「INP から『自己開示』の下位尺度に対する影響力のパスは、UNP より有意に高い値を示す」。＜仮説2＞「INP から『楽観性』と『ポジティブ志向』の下位尺度に対する影響力のパスは、UNP より有意に高い値を示す」。＜仮説3＞「INP から『セルフエフィカシー（自己効力感）』の下位尺度に対する影響力のパスは、UNP より有意に高い値を示す」。

方法 ＜調査対象者＞大学生 321 名（男 118 名、平均年齢 19.7 歳、女 203 名、平均年齢 19.5 歳）。＜測定尺度＞エゴグラム IUE の下位尺度 INP および UNP 各 8 項目。自己開示性尺度の下位尺度「開示レベル2 容易には克服できない経験」4 項目、「開示レベル4 自分の性格や能力の否定的側面」7 項目。楽観性とポジティブ志向尺度の下位尺度「楽観性」6 項目、ポジティブ志向の「上方志向」7 項目。セルフエフィカシー尺度の下位尺度「行動の積極性」7 項目、「失敗に対する不安（逆転項目）」5 項目。質問に当てはまる程度について 4 件法で回答を求めた。＜統計手続き＞各尺度の項目間相関に対して主因子解とバリマックス回転を複数回施行して項目精選を行い、単純因子構造を構成する精選尺度に対して Amos16.0 Graphics を適用した。

結果 従属変数に向かうパスの差を検定すると、UNP から「開示性レベル4：否定的な性格・能力」へのパスが INP より有意に高かった。予測とは逆の結果になり、仮説1は支持されなかった。「楽観性とポジティブ志向」の下位尺度および「セルフエフィカシー」の下位

尺度すべてにおいて、INP からのパスが UNP より有意に高い値を示した。仮説 2 および仮説 3 を支持する結果であった。

考察 <自己開示の深さに対する影響>自己養育的な機能を表す INP は、自己開示の深さに有意な影響を与えず、UNP の影響の方が強かった。<楽観性とポジティブ志向に対する影響> INP の尺度値が高くなると、自分に関する物事を肯定的に認知する楽観性とポジティブ志向が促進されることが明らかになった。<セルフエフィカシーに対する影響> INP が高い人は自分の遂行が望む結果を実現するという自己のコンピテンスを高く認知し、行動遂行に強く動機づけられる自己効力感を持つことが示された。

研究 2

目的 UNP 得点が上昇することによって INP より優位に作用すると予測される心理機能を、因果モデルを仮定した共分散構造分析を適用して仮説検証する。<仮説 1>「UNP から『向社会的行動』に対する影響力のパスは、INP より有意に高い値を示す」。<仮説 2>「UNP から『対人志向性』の下位尺度に対する影響力のパスは、INP より有意に高い値を示す」。<仮説 3>「UNP から『共感性』の下位尺度に対する影響力のパスは、INP より有意に高い値を示す」。

方法 <調査対象者>研究 1 と同じである。<測定尺度> IUE の項目は研究 1 と同じである。向社会的行動尺度 10 項目。対人志向性尺度の下位尺度「人間関係志向性」9 項目、「対人的関心・反応性」5 項目。多次元共感性尺度の下位尺度「共感的関心」10 項目、「気持ちの想像」5 項目。質問に当てはまる程度について 4 件法で回答を求めた。<統計手続き>各尺度の項目間相関に対して主因子解とバリマックス回転を複数回施行して項目精選を行い、単純因子構造を構成する精選尺度に対して Amos16.0 Graphics を適用した。

結果 UNP が強く影響すると予測された従属変数に対するパスはすべて有意であった。INP から「対人志向」の「人間関係志向」と「対人的関心・反応性」に対して有意なパスが見られたが、すべての従属変数に対して UNP は INP より強い影響力を示し、仮説 1、仮説 2、仮説 3 はいずれも支持される結果となった。

考察 <「向社会的行動」に対する影響> INP は、冷淡ではないが愛他的行動を動機づける傾向は乏しいことを示した。それに対して UNP は相手との関係に、「子ども」を慈しみ育むという「養育的親」の心理的エネルギーを供給するように作用した。UNP が上昇すると、向社会的行動が促進されることが明らかになった。<対人志向性に対する影響>

INP も UNP も「人間関係志向」で測られるような接近的な対人関係を志向する傾向を促進するが、UNP はより強く他者との親密な関係を志向するように作用した。自分の献身在相手に歓迎されることを喜びと感じる UNP の機能は、自分の行為が相手の期待に添えたかを気に掛ける意識を強める可能性を示した。自己肯定的で自己受容的な INP は、他者依存的でない自律的な対人意識を高めるように機能することが推測された。<共感性に対する影響> UNP が高くなると、相手を感じている苦痛や喜びの内的体験を自分も同じように感じ取ろうとする「共感的関心」が高くなり、また相手の側に立ったときの相手の内的体験の

状態を想像しようとする「気持ちの想像」も高くなることが確かめられた。INPにはそのような共感性を促進する作用は見られなかった。

まとめ

INPに優位な心理機能 全体としてINPは、自己に属する出来事を自分にとって肯定的な方向に認知し、自己に対する他者の認知もまた肯定的な方向に認知するように作用する傾向が示された。しかし他者に対しては否定的でないものの、自己に対するほど肯定的な関心を向けるようには作用しなかった。もっぱら自己を守り慈しむという「自己養育的親」の機能が優勢であった。

UNPに優位な心理機能 他者肯定的で他者との接近的な関係を志向するUNPは、他者の反応に関心を向け親密な関係形成を求めるように働いた。他者の利益に貢献するという愛他的な態度を強化し、他者の内的体験を自己の体験として共有しようとする共感的な態度を高めるように作用した。他方で他者の思惑を気にしたり、自分の困難経験や弱点を意識する傾向があった。自分に良いことが起きるかどうかについてはやや悲観的であり、遂行したことの失敗を恐れるという、自己のコンピテンスに対する疑念を生じさせた。

(要約者：西川和夫)